読書通信

No. 204

1　戦前戦中に『東洋経済新報』の社説を書くなど石橋湛山と昵懇（じっこん）だった外交評論家の清沢洌（きよし）が残した「暗黒日記」を、文体と語句を現代風に読みやすく書き換えた**清沢洌『現代語訳 暗黒日記』**（東洋経済新報社、２２００円）が出版された。広く読まれている岩波文庫版（山本義彦編）同様、本書も原本から抜粋、編集されている。そこで比較してみたのだが抜粋個所はかなり異なる。清沢の最も言わんとするのはどの部分か、また当時の状況をどこが的確に伝えているか、の編集判断がこれほど違うとは意外だった。削除部分も、修正された原文のニュアンスもやはり大事だし、本書を入り口に全文収録の評論社版（橋川文三編）へ進めれば何よりだろう。

それにしても今回、読み直してみた限りでも、世情への率直な物言い、痛烈な軍部・新聞批判、厳しい人物評など、屈指のリベラリストの面目躍如たることに改めて感服した。清沢の主張や感想は80年後の今もなお新鮮で、まったく意義を失っていない。丹羽宇一郎氏の解説と事項や人名の脚注が理解を助けてくれるだろう。

2　パンデミックの経済社会的な分析は極めて重要なのになお十分とは言えない。そんな中で**原田泰『コロナ政策の費用対効果』**（ちくま新書、９４６円）が刊行されたのは喜ばしい。専門家会議と政府、ＰＣＲ検査をめぐる百家争鳴、緊急事態宣言の効果、医療崩壊とワクチン敗戦、コロナ不況と対策の混乱などデータやファクトは豊富だし、分析も的確で興味深い指摘が多い。

とくに一律給付、Ｇｏｔｏキャンペーン、雇用調整助成金などでの政策対応には問題点山積だとする著者の見解は傾聴に値する。多少の異見は持ったけれども、著者の指摘が政策として受け止められていればより高い「コスパ」が得られたのではないか。残念なことである。政策担当者は言うまでもないが、広く読まれることで今後の政策に役立っていくことを期待したい。

3　カラヤンファンには申し訳ないが**ヴェルナー・テーリヒェン『フルトヴェングラーかカラヤンか』**（中公文庫、１１００円）はフルヴェンに軍配を上げるベルリンフィルの打楽器奏者による快著で、著者は音楽性ではなく人間性においてカラヤンを評価しない。30年前、初版の２年後に購入した単行本（音楽の友社）にはすでに７刷りとあった。ベストセラー並みに売れた音楽書が今回、文庫化されたわけで、多彩なエピソードからオケの内側が見えてくるのも楽しい。

4　歌舞伎の定番「慶安太平記」は三代将軍徳川家光の死に乗じ由比正雪（ゆいしょうせつ）が倒幕を計る実話だが、**真保裕一『真・慶安太平記』**（講談社、１９２５円）はこれをひとひねり（版元によれば「真相秘話」）して、諸説ある正雪の実の姿が意表を突く。中近世に詳しい本郷和人東大教授は「手に汗握る大活劇」と絶賛しているが、主人公の保科正之の複雑な心理描写など見事でとりわけ終盤はぐんぐん盛り上がり、引き込まれる。（**浅野　純次**）